



ゆかいな
むし
虫たち：

すってん
ころりんの
ウォーレス



「アハハハ！」 トリスタンが
笑いながら、玄関の ステップを
あがって 来ました。

ジェイクおじいちゃんは、
お気に入りの ロッキングチェアに
すわって、夕日を ながめています。



「^{たの}楽しそうじゃ ないか、トリスタン。」と、
ジェイクおじいちゃんが ^い言いました。

トリスタンは ^{かお}顔を あげて、にんまり
しました。「今、^{いま}すごく おもしろい
ものを ^み見ちゃったんだ！」

「^{なに}何が そんなに おもしろかったの
かい？」と、おじいちゃん。

「^{とも}友だちと ^{あそ}遊んでたんだけど、
^{いえ}家から ^で出て ^く来る ^{とき}時、
デリックが ステップを
ふみはずして
^{ころ}転んじったんだ。」



「おかしかったのは、^お起き ^あ上がった ^{とき}時、^{かたあし}片足が バケツに はまっちゃった
こと。^{いっしょう}一生けん命 ^{めい}引 ^ひ張ったんだけど ^なぬけなくて、^なやっと ^{おも}ぬけたと 思ったら、
^{なか}くつが ^なぬげて、バケツの ^{なか}中には ^なさまった ままだったんだ。」

「^{はなし}話が ^お終わる ^おころには、トリスタンは ^{おおごえ}大声で ^{わら}笑っていました。でも、
おじいちゃんは ^{わら}笑っていません。^{かな}悲しそうな ^{かお}顔になりました。」





「ひどいケガをしたたかもしれない
じゃないか！ お前たちがデリックの
ことを笑っていた時、デリックは
どんな気持ちだったろう？」と、
ジェイクおじいちゃんがたずねました。

トリストンはおじいちゃんの方を
見て、ちょっと頭をかしげました。

ジェイクおじいちゃんが言いました。
「もしお前がデリックだったら、いやな
ことが起きたのに、友だちがそれを

見て笑い出したら、どんな気持ちに
なるかな？」

「う～ん、いやな気分かな。」
トリストンは下を向いて、小声で
答えました。

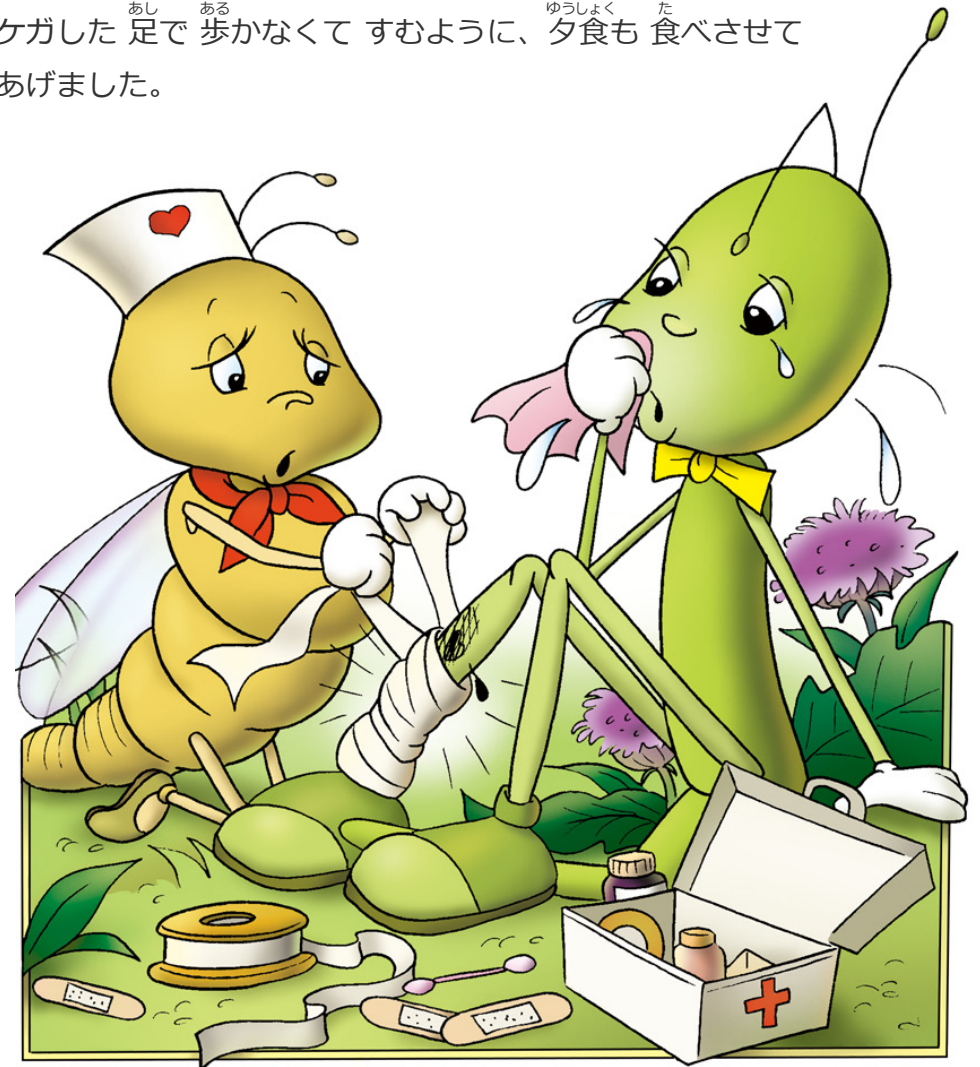
「何かが起こった時に、周りの
人たちがそれを見てお前を
からかったとしたら、ふつうはいい
気持ちはしないだろうよ。それで、
ウォーレスの話を思い出したよ。」

トリストンの顔が明るく
なりました。「そのお話をして！」



ウォーレスは草をかき分けながら、ゆっくりと歩いていました。
こしをかがめ、えだのつえに寄りかかりながら、足を引きずって
います。足には包帯を巻いて、表情もいたいたしそうです。

昨夜、ウォーレスは夕食の食べ物を集めていた時、タンポポの
根っこにつまづいて、足をケガしてしまいました。そこへ
ドゥルーディがかけつけ、包帯を巻いて、ウォーレスが
ケガした足で歩かなくてすむように、夕食も食べさせて
あげました。



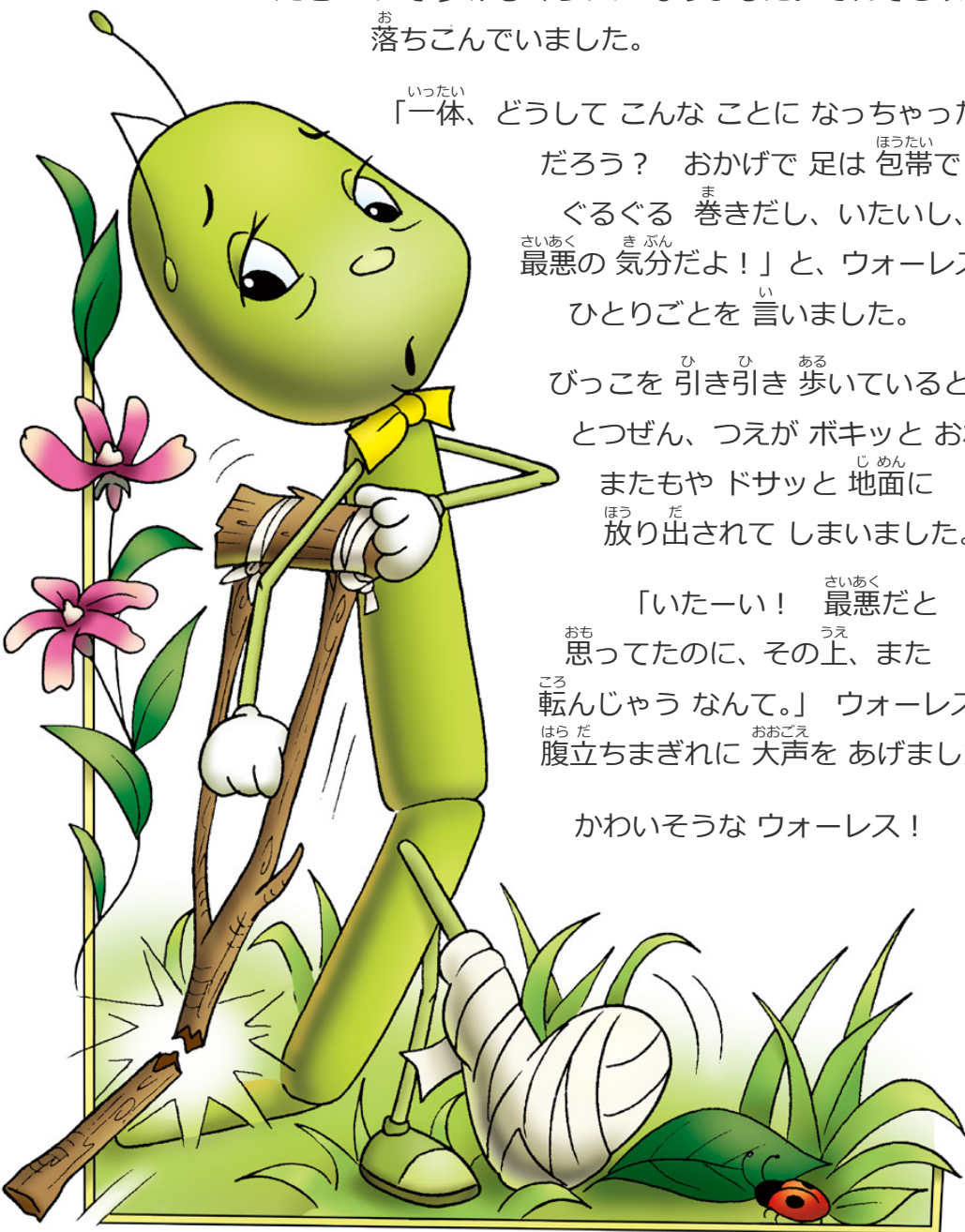
きょう
今日は、ケガがいくぶん良くなり、びっこを引しながら、
つえをついて歩けるくらいになりました。それでも気分は
お
落ちこんでいました。

「一体、どうしてこんなことになっちゃったん
だろう？ おかげで足は包帯で
ぐるぐる巻きだし、いたいし、
さいあく きぶん
最悪の気分だよ！」と、ウォーレスは
ひとりごとを言いました。

びっこをひきひき歩いていると、
とつぜん、つえがボキッとおれ、
またもやドサッと地面に
ほうだ
放り出されてしまいました。

「いたーい！ さいあく
最悪だと
おも
思ってたのに、その上、また
ころ
転んじゃうなんて。」ウォーレスは
はらだ
腹立ちまぎれに おおごえ
大声をあげました。

かわいそうなウォーレス！



するとその時、クスクス笑
こえ
声がしました。ウォーレスがふり向くと、
2ひきの小さなコガネムシたちが、葉っぱの上で
わら
笑っていました。今まで、ウォーレスがびっこを
ひ
引ながらつえをついて草の間を進む様子を
ながめていたのです。つえがおれた様子が
おかしくて、笑っていたのです。

「ウォーレスったら、ぶきよう
不器用だね。」笑いながら、
スペックスが言いました。

「すってんころりんのウォーレス！」
もう1ぴきのコガネムシの
ジバーも、こえ
声をそろえて
言いました。

スペックスも いっしょに なって、2ひきで「すってんころりんの
ウォーレス!」と、何度も ^{なんど} ^{なんど} ^{かえ} くり返しました。

ウォーレスは ^{した} ^む 下を 向いていました。足は ^{あし} ^{いぜん} ^ま 以前にも 増して いたく
なってきました。が、それよりも ひどいのは、^{こころ} 心が きずついた
ことでした。もう、^な ^{きぶん} 泣きたい 気分です。2ひきの コガネムシたちが
からかえば からかうほど、なみだが ^あ こみ上げてきました。

(どうせ ^ぶ ^{きよう} ぼくは フラフラしてて 不器用さ。いつも ケガしたり、
^{なに} ^お 何かを こぼしたり、落としてたり してばっかりだもの。まともに
^{なに} ^{かな} 何も できないんだ!) ウォーレスは 悲しくなりました。

「あっちに ^い 行ってよ。」 ^{かな} 悲しげに、ウォーレスは ジバーと
スペックスに ^い 言いました。ところが、いたずら好きの
コガネムシたちは、ますます
^{わら} ^{ころ} 笑い転げるばかりです。



「まあ、どうしたの?」

トンボの ドウルーディが、
^{しんぱい} ^{かお} ^{じょうくう} 心配そうな 顔で 上空に
^{あらわ} 現れました。「また
^{ころ} 転んでしまったのね、
かわいそうに。」



ウォーレスは、
ドウルーディには ^み ^む 見向きも せず、
ただ ^{した} ^む 下を 向いてばかり。目には
なみだが あふれています。

「すごく いたいの?」と、
ドウルーディ。いつもは
^{よう} ^き ^{とも} 陽気な 友だちが、こんなに
しょげ返って いるなんて。

ウォーレスは うなずきました。

すると、ドウルーディにも、
ジバーと スペックスが
そばで ^{わら} ^き クスクス 笑いながら
ウォーレスを
からかって
いるのが
聞こえました。



「フラフラ、ヨロヨロ、すってんころりんの ウォーレス！」
そう 言う^いと、2ひきは また 大^{おお}笑^{わら}いしました。

2ひきは ドウルーディが 来^きたのに 気^き付^づかず、顔^{かお}を 上^あげると
いきなり 目^めの 前^{まえ}に トンボが 現^{あら}れたので、びっくりぎょうてん。
ドウルーディは、残^{ざん}念^{ねん}そう^なな 顔^{かお}を して^していま^ます。

「あなたたち、何^{なに}が そんなに 楽^{たの}しいの？」と、ドウルーディ。

ジバーと スペックスは 笑^{わら}うのを やめ^やめて、すわり直^{なお}しました。
「つまり・・・その・・・」と、スペックスは 言^{こと}葉^ばに つま^つまりました。

「すごく おかし^いかったの。それだけよ。」そう 言う^いと、ジバーは
スペックスの 方^{ほう}を 向^むいて、クスクス 笑^{わら}いま^ました。

「ウォーレスが 歩^{ある}いていた^ら、つえが おれ^{よう}たの。その 様^{よう}子^すが
すごく おかし^いかったのよ。」ジバーが そう 言う^いと、
2ひきは また 笑^{わら}いま^ました。



ドウルーディは 笑^{わら}っていません。
「あなたたちには おかし^いかも
しれないけど、かわい^おそう^おな
ウォーレスは、大^{おお}ケガ^けを して^しるかも
しれないで^たしよ。それを 確^たかめ^めも
せず^わに、ただ 笑^{わら}っているだけ^たけ^たなんて。
悪^{わる}い こと^こが 起^おこ^こった 時^{とき}に からかう
なんて、相^あ手^てを も^ものすごく
悲^{かな}しい 思^{おも}いに さ^させて^てるかも
し^しれないのよ。」

コガネムシたちは ウォーレスの こと^{こと}を 考^{かん}えて^がみま^ました。その時^{とき}です。
コガネムシたちの すわ^はっていた 葉^はっぱが、2ひきの 重^{おも}みで
クルンと は^しねて、2ひきは 地^じ面^{めん}に 真^まっさ^さか^かさま。

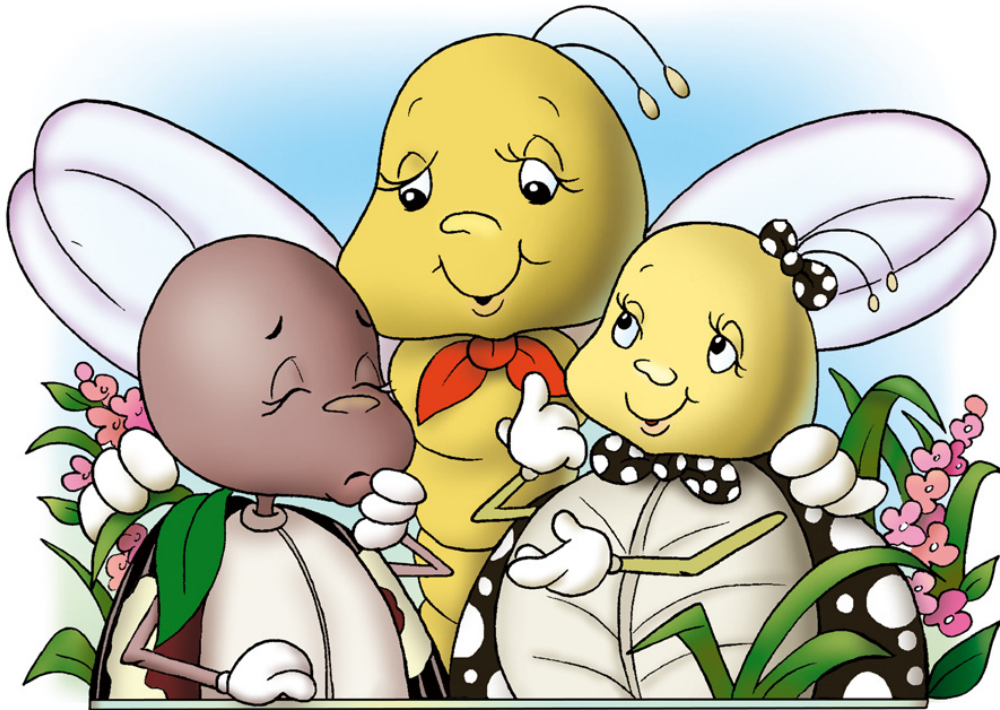
コガネムシたちが やわ^くらか^さい 草^うの 上^おに 落^おちた 様^{よう}子^すは おかし^いかったの
です^が、ドウルーディは 笑^{わら}うどころか、すぐ^すに ジバーと スペックスの
そばに かけ^かけ^けつ^てて、だいじょうぶか どうか、たず^たね^ねました。

「びっくりしたわ。あんな 所^{ところ}から 落^おちる^ちなんてね。
ケガ^けは ない？」と、ドウルーディ。

「ぼくは だいじょうぶ。」と、スペックス。

「わたしも だいじょうぶよ。ちょっ^ひと
引^ひっく^{かえ}り返^{かえ}っただけ。」と、
ジバー。





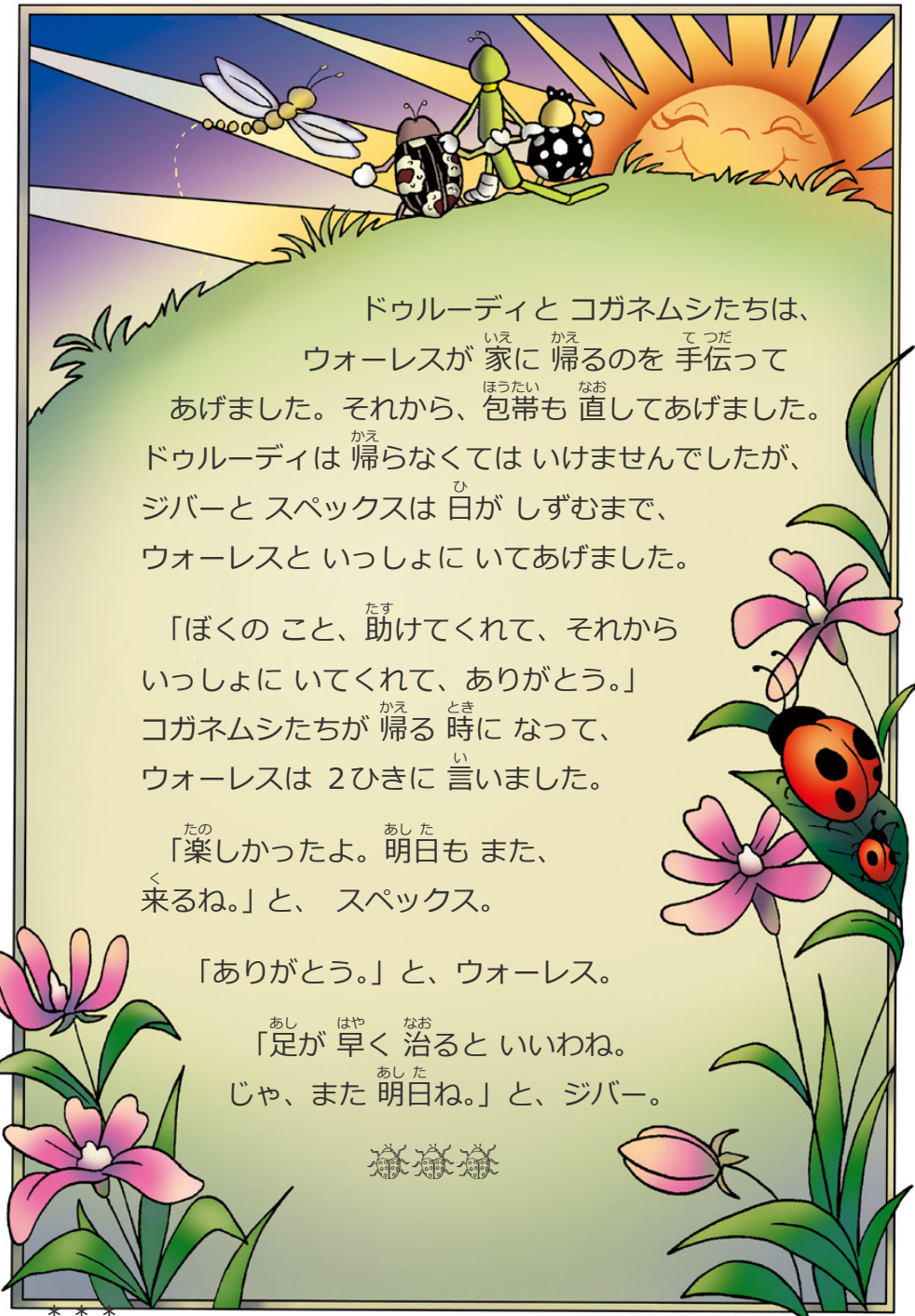
「ケガがなくて、本当によかったわ。」コガネムシたちを
助け起こしながら、ドウルーディが言いました。

「ウォーレスをからかって、悪かったよ。」と、スペックス。

「わたしも。ごめんね。」と、ジバー。

「ぼくたち、ウォーレスを助けてあげるよ。いたい足を
引きずらなくてすむようにね。」と、スペックスが言いました。

「やさしいのね。きっとウォーレスも、あなたたちの親切を
うれしく思ってくれるわ。」ドウルーディがほほえんで
言いました。



ドウルーディとコガネムシたちは、
ウォーレスが家に帰るのを手伝って
あげました。それから、包帯も直してあげました。
ドウルーディは帰らなくてはいけませんでした、
ジバーとスペックスは日がしずむまで、
ウォーレスといっしょにいてあげました。

「ぼくのこと、助けてくれて、それから
いっしょにいてくれて、ありがとう。」
コガネムシたちが帰る時になって、
ウォーレスは2ひきに言いました。

「楽しかったよ。明日もまた、
来るね。」と、スペックス。

「ありがとう。」と、ウォーレス。

「足が早く治るといいわね。
じゃ、また明日ね。」と、ジバー。





「デリックのことを からかったり して、
わる 悪かったよ。」 ちょっと ^{かんが} 考えこんでいた
トリスτανが ^い 言いました。「ぼく、デリックに
もっと やさしく するよ。悪い ^{わる} ことが
起きた ^{とき} 時に ^{わら} 笑ったり しないよ。」

「それは よかった。きっと デリックも、
おまえが ^{とも} 友だちで いることを うれしく
^{おも} 思ってくれるよ。」と、ジェイクおじいちゃんも
^い 言いました。

きょうくん
教訓：

^{じぶん} 自分が ^{ひと} 人から してほしい
ように、^{まわ} 周りの ^{ひと} 人たちにも
してあげよう。そうすれば、
^{まわ} 周りの ^{ひと} 人たちから ^{しんせつ} 親切に
してもらえるって、^わ 分かるよ。

